

子どもが ウェルビーイングを 感じられる場所

NPO法人こどもソーシャルワークセンター 理事長
幸重 忠孝さん

児童養護施設職員、大学教員を経て、2012年に居場所活動を中心とする独立型社会福祉士事務所を設立。2018年にNPO法人化し、理事長に就任。現在は滋賀県教育委員会でスクールソーシャルワーカーのスーパーバイザーを務めるかたわら、大学で児童福祉科目を教えている。

TRUST YOURSELF

不登校やひきこもりなど、生きづらさを抱える子どもが、日中、安心・安全に過ごせるところが居場所です。居場所では、ただ好きなことをして過ごしてかまいません。辛い思いをして傷ついた子どもが、「またここで楽しく過ごそう」と思える場を持つことは大切なことです。居場所活動を中心とするNPO法人を主催する幸重忠孝さんにお話を伺いました。

居場所ってどんなところ？ フリースクールとの違いは？

居場所と呼ばれる、家でも学校でもない子どもたちの場所は、ひと昔前まで、原っぱや路地裏、公園でした。高度経済成長期の頃から地域で子どもが自由に遊べる場所は少なくなり、共働き世帯の増加にしたがって児童館や学童保育が設けられました。バブル崩壊後、社会にゆとりがなくなっていく中で誕生したのが、生きづらさを抱える子どもたちのための居場所です。不登校のほか、ヤングケアラー・虐待・貧困など深刻な事情を持つ子のための居場所もあります。

このような居場所で大事にされていることが3つあります。一つ目は、「子どもの権利」*が守られていること。学校や家、塾・習い事といった場では、ときとして子どもの権利を侵害することがあります。それによって傷つき疲れた子どもは、安心・安全な場所で生きる力を取り戻す必要があります。二つ目は、子ども自身に選択権があること。過ごし方なども自分で決めて、丸ごと肯定されることによって自尊感情を高めます。三つ目は、子

どもがウェルビーイングを感じられる場所であること。ウェルビーイングとは、身体的・精神的・社会的に満たされた幸せな状態を表します。

不登校状態にある子が学校代わりに行くところとしては、ほかにフリースクールがあります。フリースクールには、勉強に重きが置かれたところや自然体験から学ぶところなどがあり、それぞれの特色を活かしたプログラムを組みます。それに対して居場所では、1日中寝て過ごしてもいいし、おしゃべりやゲームをして遊んでも勉強してもかまいません。一日楽しく過ごして、「またここへ来たいな」と思うだけでしばらく頑張れるから、笑顔で帰ることが目標です。

人は生きていくための最低限の生活が保障されていないと、その先へは進めません。衣食住や安心・安全な



*1989年に国連総会で採択された子どもの権利条約(児童の権利に関する条約)では、「差別の禁止」「生命、生存および発達に対する権利」「子どもの意見の尊重」「子どもの最善の利益」の一般原則などが定められている。

環境があって初めて、勉強や友達づくりへの意欲も湧いてきます。不登校の場合、家庭や学校以外の場を求めている子は、居場所で自分らしさを取り戻す時間が必要な時期なのかもしれません。

暮らしの部分は家庭でしっかり押さえていて、親子関係が良好で、経済的な余裕もあるなら、子どもの個性に合ったフリースクールを探してみるとよいでしょう。何かしらの意欲はあるけれど、それが学校では見つけられないという場合は、四角四面な枠組みのない学びの場のほうが、個性を伸ばしたり、やりたいことを明確にしていける助けになると思います。

居場所のメリットとデメリットは？

不登校の場合、居場所のメリットは、人と触れ合う機会になることです。家にこもっていると人間関係も限られ煮詰まってきますが、居場所があれば外に出るきっかけとなり、行けば同世代だけでなく、スタッフや地域のボランティアとも交流できます。若い世代のボランティアは、趣味や感覚も近いので親しみやすく、進路や将来につながる良い刺激を与えてくれます。

デメリットは、居場所がどんなところか、社会や周囲の大人にわかってもらいににくいことです。外からは子どもが好き勝手に楽しく過ごしているようにしか見えないので、ただ甘やかしていると思われがちです。学校や家で苦しい思いをして心が折れてしまっている子のケアは、ウェルビーイングを感じるところから始める必要があるということなかなか理解されません。実際には、ここを逃すと社会と断絶してしまったり、命を絶ってしまう恐れすらある崖っぷちの大事な場所なのですが、活動内容とその効果を明文化しにくいいため、公的な支援を十分に受けられないのが現状です。



支援を必要とする子どもにリーチすることの難しさを語る幸重さん。子どもを取り巻く様々な社会課題や地域でも居場所活動の社会啓発を目的とした講演・研修も行っている。



夏休みや冬休みなど長期休暇には、思い出となる遠足やお泊り活動も。多くの子どもにとって当たり前になっているクリスマスプレゼントやお年玉を、居場所でもらうのも楽しみの一つ。

居場所を経た子どものその後の進路は？

居場所を経た子どもたちの進路は大きく二つに分かれます。一つは、居場所でエネルギーをチャージして学校復帰する、フリースクール等へ行くようになるケース。高校や大学に進学する子もいるし、調理師や美容師など将来の夢に向けて専門学校へ進む子、働きはじめる子もいます。

もう一つは、ひきこもり状態になってしまうケース。この場合、居場所は社会のセーフティーネットの役割を果たします。気になる状況の子がいても、学校は卒業するとおしまいで、児童福祉のつながりも成人を機に途切れてしまいます。その点、居場所は長いスパンで子どもを見守り続けることができます。

不登校状態にある子どもたちの進路として、いま注目されている施策の一つが夜間中学です。2025年4月、滋賀県初の夜間中学が開校されることになりました。義務教育課程を全うできなかった大人にとって、貴重な学びのチャンスです。先日、居場所で10年近く関わる20代半ばの若者に夜間中学の話をしたところ、関心を示し、説明会に参加することになりました。こうした情報を届けられるのも、長年培った信頼関係があるからこそといえます。

子どもは本来、潜在的な力を秘めた存在です。ただ、外の世界とつながる方法を知らないために、その力を発揮できなくて、学校に行けなくなったり家で苦しい思いをしているのです。私は居場所活動を通じて、子ども一人ひとりが自身できらりと光るものを見つける手助けをしたいと考えています。居場所が、しんどさを抱えた子どもたちの閉塞した状況に小さな希望をもたらす場になれば…と願っています。